

## 食の循環について

株式会社グッドバンカー  
リサーチチーム

今年は「持続可能な食」が大きなテーマになりそうです。

世界的な穀物相場の高騰や、2008年1月に発生した中国産冷凍餃子問題などを通じて、カロリーベースで40%程度にとどまる日本の食料自給率向上に関心が高まっています。また農業現場においては、肥料価格の上昇についての話題も増えているそうです。

食料生産には肥料が不可欠であり、穀物や野菜だけでなく畜産飼料の生産においても多くの肥料が使われています。その大半が化学肥料ですが、主に石油、天然ガス、リン鉱石、カリ鉱石など埋蔵量の限られた天然資源によって製造されています。特にリン鉱石は枯渇が予測されており、2008年4月、主要産出国である中国はリン製品に100%の特別輸出関税をかけることを発表しました。世界的な資源の困り込みはこの分野にも広がっており、持続可能な食料生産に向けて化学肥料に依存しすぎない農業への取り組みが検討されています。

「持続可能な食」の実現には「食の循環」が一つのカギとされます。生産地で作られた農作物の残渣は消費地で生ゴミとして処分されてきましたが、循環型社会の構築に向けた様々な取り組みが進められています。

食品メーカーでは、生産工程で発生した残渣や養鶏・養豚業から生じた排泄物などの処理施設を設置して、有機肥料の生産や農地への還元を進めています。小売業では、弁当や惣菜などゴミとして捨てられる残渣を再資源化し、それらを活用して生産した野菜などを店舗で販売する取り組みがみられます。農業生産法人を設立し農場経営を開始する企業もあり、店舗・堆肥化センター・直営農場をループで結ぶ完全循環型リサイクル網の構築をめざしているとのこと。

また一般企業でも、社員食堂などで排出した生ゴミを堆肥化して地域農家に活用してもらい、その堆肥から作られた農作物を社員食堂の食材に利用する動きがでています。その他、電機メーカーでは、食品残渣を肥料に再利用する生ゴミ処理機の開発を進めており、業務用だけでなく家庭用での食品リサイクルの普及促進につなげています。

「食の循環」に向けた企業の技術革新、新たな製品・サービスの提供、コスト削減などを通じて、食料自給率向上につながる「持続可能な食」への取り組みが広がっていくことを期待したいと思います。